

安楽寺寺報

聞光

第57号
秋三会号
2010/11/1

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

仏について 信楽峻磨

仏とは、もともとお釈迦様のことを言います。いまから二千五百年の昔、インドに生まれられた釈尊が六年の苦行の末に「さとり」を開かれて、仏になられたのです。だから仏とは、「さとり」を開いた人ということを意味します。

そこでその「さとり」とは、この宇宙、世界に貫徹している道理、真理について、正しく知見し、それに「めざめる」ことをいいます。私たちの現実の生活は、そういう「さとり」とは反対の、「まよひ」の日々を送っているわけです。「まよひ」とは「酔」のことです。酔ったまま酔って、自分ばかりをなやましていって生きています。私たちの日々



ております。

そこで仏教は、その「さとり」の立場から、私たちの「まよひ」に向かっ、そういう自己中心的な「まよひ」にめざめて、正しい道を生きるように教えます。どうすればそう

の生活は、一寸先も見えないままに、常に損か得か、勝つか負けるか、自己中心的にあくせくしながら、さまざまな悩み、苦しみを背おうて生き

なりうるのか。

仏とは、また「如来」とも言います。如来の如とは真如のことです。「まこと」のことです。そして来とは来ることで、仏、如来、その「さとり」とは、いつも私に向かって来し、働きかけていると言っています。親鸞は、この仏、如来について、この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり。(唯信鈔文意)

と明かされています。このお粗末な私の生命の中に、仏が来たり宿っているというのです。私の生命とは、もともと地獄の底からはいあがったもので、その全分が地獄の生命です。そういう私の地獄の生命の中に、仏の生命が宿っているというのです。真っ黒い私の生命の中に、ピカリと光る仏の生命が屈しているのです。

真宗の念仏の教えとは、そういう私の生命に屈している仏の生命に、深く「めざめ」ていくことを教えるものです。果てることもなく「まよひ」続けているのが私で、仏の「さとり」の生命を頂いて、今日もまた

生かされて生きるという、まことに不思議な事実に気づかされ、それについて「めざめ」ていくのです。

すなわち、その日々を仏壇を大切に、私から仏に向かって称える念仏でありながら、実は、いまこの私の生命の中に宿っている仏が、私に向かって自分を名のっていてくださる、仏の喚び声だと思いつき、そのように味識していくのです。淺原才市同行の歌に、

如来さんはどこにおる。如来さんはどこにおる。才市が心にみちみちて、南無阿弥陀仏をもうしておるよ。

というものがありません。まことに深い味わいです。

私たちは、どこまでも「まよひ」の人生を生きているばかりではありませんが、まことのお念仏に生きるならば、その「まよひ」の日々の中にも、仏の「さとり」の生命といっしょに生かされて生きていくという、新しい人生の道がひらけてくるのです。

安楽寺法要案内

十二月	成道会	日時 12月4日(土)朝・昼 講師 法林 英俊 先生 テーマ 「浄土とは何ですか」
	御止忌	日時 1月16日(日)朝 講師 住職自勤 テーマ 「人生の意味について」
一月	お待ち受け法要	日時 1月16日(日)昼 ★13:30~15:30 講師 東京 本多静芳先生 テーマ 「いのち、見えるとき」
二月	涅槃会	日時 2月13日(日)朝・昼 講師 住職自勤 テーマ 「さとりとは何でしょうか」

親鸞聖人七五〇回大遠忌 お待ち受け法要

上記、法要案内にもお知らせいたしましたが、明年1月16日に親鸞聖人七五〇回大遠忌お待ち受け法要を厳修いたします。このお待ち受け法要は、堅徳寺、法眼寺、明法寺支坊と安楽寺の4ヶ寺で東京の本多静芳先生をお招きして、各お寺でお待ち受け法要をお勤めするという計画です。

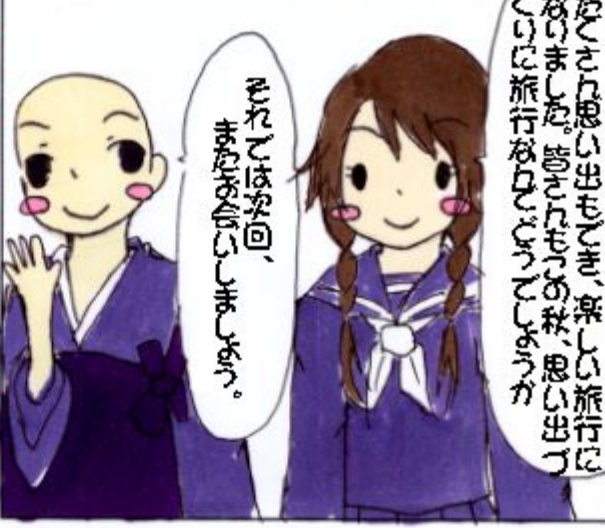
- 1月14日 朝席—法眼寺
- 1月14日 昼席—明法寺支坊
- 1月15日 昼席—堅徳寺
- 1月16日 昼席—安楽寺

と予定を組んでおります。4ヶ寺で勤め合いをして、特別法要をお勤めいたしますので、たくさんのお参りをお待ちしております。4ヶ寺のどこのお寺へお参りになられても結構です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。お待ち受け法要だけ開始時間を下記の通り変更させていただきますのでご予定下さい。

お待ち受け法要 13:30~15:30

安楽寺マンガ通信

(第11回) 信楽めぐみ作



聞見 平生業成

信楽晃仁

一〇月一八日、長倉伯博先生という鹿児島のお坊さんが滋賀医科大学という国立大学で緩和ケアの講義をされました。一三〇名の医学生と看護師の中に、私たち僧侶や本山職員が三〇名ほど混ざり聴講し、学生と共に話し合いをしました。

長倉先生は末期のガン患者のQOL(クオリティオブライフ)人生の意味や質を求めることによって、患者と家族を幸せにしていきたい、という願いをもって活動をしておられます。現在、国立病院機構鹿児島医療センターの緩和ケアチームに僧侶の立場で入り、お医者さんといっしょに、末期ガン患者の心のケアを行うことで、患者さん自身や、その家族を幸せに導いています。

その姿がテレビにも放映もされました。現在国立の緩和医療チームに入っている日本でもただ一人の僧侶でしょう。(医師になられたお坊さんは他でも入っておられます)



この授業は早島理滋賀医科大学教授が、これから医者になる学生にこの長倉先生の話しを是非聞かせておきたいという思いから、反発を押して切った必死に話したのだそうです。

早島先生が「長倉先生は全く仏教語を使わないで、授業をされる。そうでなくては国立では受け入れてもらえないし、国立では授業はできない。なぜなら学生の中にも、創価学会や、多宗教の学生もおりに、一宗教に偏ると、必ずクレームが付く。また本来仏教語を使わないで伝えることができないならば、それは本物ではない。お釈迦様は仏教というものが無いときに、自分の言葉で話された。それが後に仏教になっただけだ」と後の懇親会でお話し下さいました。

考えて、悩みつづ本気で取り組んでくれていました。私としてはとてもいい縁を頂きました。色々なことを考えさせていただき、また私たちが出会っている親鸞聖人の教えのすばらしさにも改めて気づかせて頂きました。

場面に出てきます。第十九願の教えといわれる観經には死を目の前にして悩み苦しむ患者に、善知識が念仏しなさいと教えます。するとその患者は、苦しんで心に仏を思うことができないといひます。善知識は心ではなく口に南無阿彌陀仏と称えなさいと教えると、その患者は苦しみの中で念仏を称えます。すると一声ごとに八〇億劫の生死の罪が除かれて、その人は浄土に往生をしたという内容です。(安楽寺生活聖典七四頁下段参照)緩和ケアの場での救いがあるという観經に出ているのです。

二十歳そこそこの医学生達とも色々話しをして、「いまどきの若い者は」といふ声も聞きますが、いやいや現代の若者も捨てたもんじゃないとあります。さすが国立大学の学生だと、言葉の端々から頭の良さがにじみ出ていますし、色々と

つまり第十八願のお念仏の教えにあったものは、死に際に畏れ、悩むことはない。浄土真宗の教えは平生業成。私たちが死を超える道は

平生(普段の生活)の中にあるのであって、臨終に、死を目前にしてあるものではないといわれるのです。冷静に考えてみても、身体も苦しく、考える能力も気力もなくなり、時間も残り少ない終末になって、本当のみ教えにあらうことは至難の業です。長倉先生のように、うまく導いてくださるスーパー僧侶がそばにいれば、ひよっとすると笑って亡くなっていくことができるかもしれせん。しかしほとんどの人が、そしてほとんどの僧侶が死を目前にした患者にその救いを伝えきる力量は持ち得ず、人は苦しんで亡くなっていくことになりす。だから「はやく後生の一大事を心にかけて」と白骨の御文章は私に勧めるのです。蓮如上人は「仏法は若きときにたしなめ」と「歳をとってから寺参り」という私たちとは逆に、元気なときに仏法を聞いておかなければならないと言われます。平生業成といわれる教えに今あっておくことが大切なのです。

われまふ。国の法律ですからしかたがありません。この度の長倉先生も仏教語を全く使わず、とにかく自分の言葉でお話し下さいました。これは確かに大切なことです。しかし、ここにもう一つ、なぜ法然上人も親鸞聖人も念仏一つといわれたのでしょうか。法然上人も親鸞聖人もいくらかでも自身の言葉はもっておられたはずで、そのお二人が「念仏一つまこと」と、お念仏申されたのには深い意味があると思います。自らの言葉を疎かにしてはなりません。どれほど心を込めた言葉であっても伝わらないものが、念仏の中にはあるのです。それに私たちは今出会っているのだと思ふのです。

しかし苦しむ人をどうにか導きたいという心も大切です。私たちは先々苦しむことがわかってる人たちに、今この教えにあらうことを勧めることしかできません。臨終ではなく、平生に救いを伝えるのです。緩和ケアは病気になるって始まります。念仏の救いは今始まります。この念仏こそ死を超え、苦しみを超えるもつとも確かな予防医学だと思ひます。

仏事の♡♡♡ 金封の表書き

前号で、お布施というのは、報謝の念から如来さまに捧げるものであると申しました。実は浄土真宗の仏事における金封(水引)のお供えは、全てこうしたお布施なのです。しかしながら、実際には、仏事の種類や状況によってさまざま。表書きが用いられているようです。いくつかのケースに分けて見てみます。

まず葬儀や法事などで施主(喪主)が僧侶に差し出す金封には「お布施」と書かれることが多いようです。これではよいのですが、この「お布施」は僧侶に差し上げるためのものではなく、お寺の御本尊・阿彌陀如来にお供えするものですから、差し出すときには、お盆にのせ「おことづけして失礼ですが・・・」とかの言葉を添えるのがよいでしょう。丁寧な所では前もってお寺に直接持参されます。

「お布施」以外の、例えば「お札」「お経料」「回向料」



尚、水引の色は、葬儀、中陰など悲しみの時は黒または黄、入仏法要や報恩講など慶びの時は赤、その他の時は黄が一般的です。